

研修医・指導医リレーエッセー③①



津山の地で紡ぐ、臨床への第一歩

津山中央病院 卒後臨床研修センター 後神 健人



岡院長（後列中央）と研修医（後列右から2人目が筆者）

私が生まれ育った郷土、岡山。その県北に位置し、かつて城下町として栄えた美作地方の中心地・津山市に拠点を構える津山中央病院で自治医科大学を卒業した私は、医師としての第一歩を踏み出した。当院は、三次救急を担う救命救急センターや地域がん診療連携拠点病院としての機能を備え、県北における医療の砦として機能している。日々、救急搬送のサイレンが鳴り響き、common diseaseから超急性期の重症疾患まで、実に多様な背景を持つ患者様が運び込まれてくる。かつては野戦病院とも呼ばれたという当院での、この圧倒的な幅広い症例数と、主訴から診断・治療へとダイナミックに展開していく初期臨床研修の環境は、厳しくも最高に充実したものだ。

当院での研修における最大の強みは、指導医の先生方との距離の近さにある。とりわけ初動が命となる救急外来では、一刻を争う緊迫した状況下でも冷静沈着に全体を俯瞰し、迅速かつ的確な初期対応が要求される。指導医の先生方の圧倒的な判断力を間近で拝見し、緊迫した現場でこそマルチタスクを整理し、優先順位を見極める重要性を叩き込まれた。全力救命への飽くなきこだわりは、他の追随を許さないのではないだろうか。他にも、総合内科・感染症内科の藤田先生から受けたご指導は、私の医師としての基本姿勢を形作る上で、極めて大きな財産となった。病歴や身体所見、緻密な検査データをジグソーパズルのように組み合わせ、真の病原体に迫っていく感染症診療の現場は、まさにミステリーの謎解きに似ていると感じた。藤田先生は、目の前の熱源に惑わされそうになる私に対して、常に「なぜこの抗菌薬を選択するのか」「その根拠となるエビデンスは何か」を論理的に問いかけ、思考の手を止めさせない。長年のご経験に裏打ちされた、医師として最も根幹となる「型」の重要性を、先生の背中から学ばせていただいた。熱いレクチャーの後に得られる学びの深さは、教科書を何回めくるよりも五感に染み渡るものだ。

また、研修生活を支えてくれるのは病院の中だけではない。ここ津山市の豊かな風土と人情も、日々の糧となっている。春には鶴山公園の壮麗な桜が咲き誇り、四季折々の自然が美しく街を彩る。そして何より、地域住民が非常に温かい。「若い先生、頑張って立派なお医者様になってな」と笑顔で声をかけてくださるその一言に、張り詰めた緊張がふっと解け、この地域の医療に少しでも貢献したいというモチベーションが心の底から湧き上がってくる。勤務の合間に、同期の仲間たちと連れ立って暖簾をくぐる、地元の味わい深いラーメンの味もまた、研修医時代の忘れられない思い出の一つになるだろう。

この恵まれた環境で、熱心にご指導くださる先生方、そして切磋琢磨し合える同期に囲まれ、臨床に没頭できている幸福を日々噛み締めている。まだまだ未熟で、自分の無力さに直面することばかりの毎日ではあるが、津山の地で培った「型」と、患者に寄り添う心を忘れることなく、信頼される医師を目指して一歩ずつ歩みを進めていきたい。



研修医が不定期で開催している勉強会のチラシ